

特定非営利活動法人

Alternative People's Linkage in Asia

APLA

2009

事業報告

2009年度は、APLA/あぷら始動から2年目。「from ネグロス」として、日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC)の経験やつながりを新しいアジアの仲間へとつなげていく年となりました。フィリピンではネグロス島と北部ルソンの交流が進み、日本国内においても農業・酪農現場と出会うツアーなどを行い、少しずつではありますが、横に広がってつながる人たちと、新たに、または再度出会いました。

2008年に世界中を襲った経済危機により、貧しく弱い立場の人たちがより厳しい暮らしを強いられる中、「地域を元気にしよう！」というキャッチフレーズで、外部に依存しすぎずに農を中心とした暮らしを自分たちで創りだそうと活動を進めてきました。特にネグロス島では、若者のための実践農場と農民学校を併設したカネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)が農民主導で立ち上がりました。「農や漁業を軸にした地域づくり」を具現化していく新たな場所の誕生です。他のアジアの仲間とも交流しながら、それぞれが影響しあい、深化していけるような関係性の基盤ができた一年となりました。

海外プロジェクト支援事業

フィリピン・ネグロス島

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス (KF-RC) が誕生しました

2007年夏より、ネグロス島では3つの農民グループがネットワークを形成し、それぞれのグループの頭文字をとって“NBA”として活動を進めてきました。今のネグロスの農業とは一体何なのか、農民はこれからどうしていくべきか、議論が交わされました。農民たちはみな各地で小規模ながら農業を続けてきていましたが、過去継続的であった NGO からのサポートがなくなり、改めて農民たちが切望したことは「NGO だけに頼るのではない、自分たちが主体となって活動し、孤立しないで生きられる場を作ろう」ということでした。こうして誕生したのがカネシ

ゲファーム・ルーラルキャンパス (KF-RC) です。これから地域づくりを担っていく次世代を育てるための実践農場と、農民たちの学び場となる農民学校の機能を併せもった農場の誕生です。農場は、3つの農民グループだけではなく、バラゴンバナナやマスコバド糖の生産者たち、行政や小学校などとの連携を考えています。そして何より大切なのが、砂糖労働者が多いネグロスで、農で生きていくこと、農民であることの誇りを持つという価値観を育てることです。農場整備に時間がかかった2009年ですが、2010年は農場の活動が本格化します。



KF-RC 実習生第一期生たち。農場では、自分たちで野菜の栽培、家畜の世話などを行い、それを販売して稼ぐところまでやることになります。彼らは、卒業と同時に、苗や豚を地域へ持ち帰り、地元で農業をする決心を固めています。

KF-RC には様々な適正技術が導入されています。微生物とミネラルの働きをうまく利用し、土と水が生成される生態系のシステムを人工的に再現した BMW 技術、バイオガスプラント、外からのエネルギーを必要としない水圧自動揚水器 (ランポンプ・右画像) などが設置されました。



2010年3月22日(月)にKF-RCの開所式が行われ、農場のお披露目と歌や踊りを含めたお祝いのセレモニーが行われました。KF-RCの関係者に加えて、地域の村長、小学校教員、農場学校の協力者、オルター・トレード社 (ATC)、また日本と北部ルソンからの代表者などが参加しました。

フィリピン・北部ルソン

BMWプラントを設置しました

2009年7月、BMWプラントが北部ルソンにも設置されました (パルシステム・レインボー・パル基金より助成)。APLAのパートナーであるCORDEV (コルデブ) が既に組み始めている有機堆肥作りや、有機米生産、近隣の養鶏者などにBM活性水が使われています。

10月に通過した台風により甚大な被害を受けた米生産者たちも有機米生産に取り組み始めていました。依然として化学肥料の高騰が続き、有機肥料使用へ期待を寄せている生産者がいます。化学肥料の使いすぎにより土が弱くなってきていることを憂慮する農民たちもいます。

CORDEV では、バランゴンバナナ出荷団体としての NGO から活動が始まりましたが、生産者協同組合に組織改変を行ってから 2 年が経ち、バナナ以外の生産物、コーヒーやカカオ、米生産の取り組みも少しずつ始まっています。

CORDEV のメンバーでもあるモイセス・ピンドクさんがリーダーを務める“しいたけプロジェクト”に対しては互恵のためのアジア民衆基金（APF）より融資が受けられることになりました。焼畑が中心で山が荒れ果てたタジイ地域で、しいたけ栽培の原木を育てるための植林と合わせて、しいたけの生産を始めます。



有機米生産に取り組む生産者たち



APLA の融資で運営されている CORDEV の有機堆肥製造場。DAR（フィリピン農地改革省）と共同で運営されているテクノ・パーク内にあります。BMW プラントもここに設置されています。



2010 年 3 月にしいたけの植付けを始めました（しいたけプロジェクト）。しいたけの作り方の指導を受ける研修生たち。

インドネシア

石けん運動を進めるにあたって

エコシュリンプの生産地インドネシア・スラバヤ。スラバヤはインドネシア第二の都市で大きな工場地帯でもあります。工場からの排水や、一般市民に日常的に使われている合成洗剤の排水などで、水の汚染が懸念されています。エコシュリンプが育つ池につながる川の水質改善を目的とし、エビの生産者や地域住民たちと石けん運動に取り組み、環境へ配慮する意識を広めると共に、石けんの普及活動を進めたいと考えています。

そのために、2009 年 10 月に、パルシステム・レインボー・

パル基金から支援を受けて石けんを製造する機械が設置されました。また、2010 年 3 月には、日本での石けん運動を紹介し、インドネシアの人たちにもなぜ石けんを使うのか、人や環境への影響を知ってもらうための石けんセミナーも開催しました。現在は ATINA 社工場での使用のための液体・粉石けんのみです。一般の人びとが使用できる石けんの販売を求める声も多くあがっています。2010 年は、この石けん運動をより進めていきたいと考えています。



2010 年 3 月、APLA 会員の大嶋朝香さん（フォーラム・アソシエ運営委員長）と APLA 理事の廣瀬康代さんが講師としてスラバヤを訪問し、エビ生産者や地域住民、ATINA 社で石けんセミナーを行いました。

自作で石けんを製造する機械（石けん製造機）を作りました。



東ティモール

農民たちのニーズ発掘

APLA の活動が開始し、20 年以上にわたるネグロスとの経験を東ティモールに生かせたら…と始まった APLA と東ティモールの関係。東ティモールの人びとの暮らしや、農民たちが何を思っているのかを理解しない限り、どのようにつながっていけるか分かりません。そのために、2007 年、2008 年には現地訪問を行い、また 2007 年には農村調査、2009 年には(株)オルター・トレード・ジャパン (ATJ) がコーヒーの集荷を行っている地域周辺での（一部その他の地域も含む）調査を行いました。地域におけるニーズ、これまでの組合活動や NGO など外部からの支援の成果や問題点、地域の将来の目標とそれを達成するための具体的な道筋などが議論されました。その結果、どの地域でも道路・水道・電気などの基本的インフラ、教育や医療などの社会サービスといったニーズが何よりも高いことがわかりました。そ

れらが重要なことは言うまでもありませんが、APLA が果たすべき役割は、具体的なモノやサービスを支援することではなく、「農を軸にした地域づくり」の実現やそのための経験交流の場をつくることです。どの地域で、どのような形で、人びとの自発的な活動をサポートできるか、更なる農村の現状把握や農民との直接的な意見交換を経て、今後の東ティモールでの活動計画を立てていきます。



エルメラ県レキシ地区での農民との話し合い。ポルトガル・インドネシア時代にコーヒー農園（プランテーション）であった土地を、独立後、農民で分配してコーヒーを栽培しています。しかし、新しい土地法で自分たちの土地と認められない可能性があり、現在政府に土地を認めるよう訴えかけています。

村の一般的な台所も見せてもらいました。この女性は抱えている借金の返済のために、ドラム缶で作った釜を利用してパンを焼いていました。



現地の人たちから伝統的な家の説明を聞く APLA 事務局スタッフ。

地域間交流

ネグロス島と北部ルソン



【バシ作り】北部ルソンのベニー神父が、ネグロス農民たちへどぶろくと砂糖キビワインの造り方を伝授。

フィリピンのパートナー地域ネグロス島の農民と北部ルソンの農民の交流が始まっています。2009 年 1 月には 13 名の農民がネグロスから北部ルソンを訪れ、先住民族文化や先祖代々伝わる農業の知恵などを学びました。

2010 年 3 月には、KF-RC の開所式に、北部ルソンツアーで案内役を務めてくれたギルバートさん始め 4 名がネグロス島を訪れ、KF-RC 滞在や、適正技術を学ぶため自動揚水器を開発している AID 財団などを訪問しました。戻った後、参加者たちは KF-RC の循環を意識した農場や適正技術の導入に魅力を感じ、自分たちでもやれることをやりたいと話しています。

互恵のためのアジア民衆基金 (APF) ・農村ツアーに参加

2009 年 10 月韓国で開かれた APF 設立総会に、APLA 及び APLA の海外パートナーたちが出席しました。その後海外参加者のために組まれた韓国農村ツアーに参加し、各地域代表者の交流も深まり、韓国で進んでいる有機農業や加工施設などの現場を視察することができました。

※ APF については 11 ページ＜用語集＞参照



案内役を務めてくれた韓国の生協ドゥレコーブの生産者組合が始めた店舗を視察。

❏ 広報・出版事業

機関紙ハリーナ発行 (Vol. 2 - 4号～7号発行)

2009 春 4号

【特集】パレスチナの農業は今

～抵抗としての農業、命をつむぐ農業～

- パレスチナー占領下では農業もまた占領されている◎近藤康男
- 食からみるベツレヘム周辺の人びとの豊かな暮らしと現実◎藤屋リカ
- ドキュメンタリー映画『オリーブの木がある限り』◎大野和興



【特集】農を軸にした地域づくり、若者が主役になろう！

～第 1 回 APLA フォーラム in 三里塚～

グレッグ・ラシガン、アルフレッド・ボディオス、岡村三郎、阿南嘉起

- 成田有機農業の軌跡と展望—空港城下町で地域自立を考えていくために◎相川陽一
- アジアの地域の若者たち—アジア学院インドネシア卒業生の実践◎遠藤優子

2009 夏 5号

2009 秋 6号

【特集】水はみんなのもの

- 「水はわたしたちのものだ」—世界で広がる「水」を取り戻す運動◎山本奈美
- 小規模な水道システムの充実を図る◎オウカ・イグゼンハ
- 荒川を歩く—荒川と私たち◎長倉徳生



2010 冬 7号

【特集】暮らしを支える“自分のお店”が消えてゆく

～世界中に蔓延するショッピングモール～

- ショッピングモールがむらとまち、農と食を壊している。—地域内循環でむらの再生を◎西沢江美子
- Report：フィリピン、ネグロス 活気あふれるダウンタウン、モールと商店街が共存する理由は？◎大橋成子
- Report：インドネシア、スラバヤ 大型モールの台頭と消え行く露天市場◎津留歴子
- Report：中国 格差を生み出す近代化の波◎高橋敬子



ブックレットシリーズ第二弾 『Maayong Hapon フィリピン・ネグロス』発行



2009年10月発行

ネグロス島の砂糖の歴史、農地改革問題、元砂糖キビ労働者が自立した農民となるまでの軌跡などを、分かり易くまとめました。民衆交易バランゴンバナナ、マスコバド糖の紹介もしています。これを読めば、ネグロス島まる分かり！ 授業、勉強会、学習会の機会にも教材として活用できます。

手わたしバナナくらぶニュース 194～199号発行

特集ラインナップ

- 194 ガザ地区緊急支援 パレスチナ国内では…
- 195 北部ルソンでの新たな挑戦に向けて
- 196 砂糖がもたらしたもの
- 197 マイペース酪農を見学して見えてきたこと
- 198 アジアのパートナーと韓国の農村現場を訪問しました。
- 199 第二回アジア連帯経済フォーラム参加報告



交流事業

三里塚フォーラム

2009年5月、APLA第2回総会の後は、千葉県成田市へ場所を移し、「農を軸にした地域づくり、若者が主役になろう！」と題し、フォーラムを開催しました。成田市に新規就農した若者たちと、フィリピンからのゲスト（ネグロス島よりフレッドさん、北部ルソンよりグレッグさん）が参加し、シンポジウムを行いました。ネグロス島は砂糖農園の地主との土地闘争、北部ルソンはダム開発や鉱山開発を進める多国籍企業との土地闘争を経験しています。成田空港建設のために闘争を続けている三里塚の土地で、経験を共有し、新たな地域づくりへの展望を話し合いました。



新規就農した方たちの畑を回りました。

“北海道の酪農現場を訪問する旅”

2009年9月4日～6日の日程で、北海道中標津町にある三友農場を訪問しました。会員・関係者を含め15名以上の方が参加しました。

日本の酪農の現状について学ぶこと、APLAの国内ネットワークを広げていくこと、「マイペース酪農」の理念や活動の様子をAPLAの海外パートナーにも伝えたいとツアーを企画しました。



毎月1回勉強会を開いているマイペース酪農の会に参加させていただきました。牧草地について説明をする三友さん。

グリーンコープ青少年ネグロス体験ツアー

2009年7月、APLA 団体会員であるグリーンコープ共同体主催の「青少年ネグロス体験ツアー」が開催されました。日本の高校生とネグロスの青年たちが1週間共同生活を行い、共に劇作りを行いながら交流を深めます。言葉に始まり文化や生活習慣が全く違う中で育った若者たち。全てが新しい経験を経て、それぞれが心に残る夏を過ごしました。



【人生の木】これまでの自分の人生を木に例えてそれぞれ発表しました。

新しいネグロスに出会うツアー（2010年3月19日～24日）



2010年3月、APLA で初めて募集型のツアーを行い、6名が参加しました。KF-RC の開所式参加を始め、バランゴンバナナの生産地で生産者と交流、地主との壮絶な闘いを経て土地を獲得したエスペランサでは、闘争中に地主の私兵に射殺されたジョニー・ガイランさんの追悼式にも参加しました。

エスペランサの皆さんとの集合写真。

イベント

7月11日、5月のフォーラムで出会った千葉県成田市（三里塚）の野菜と、エコシュリンプやATJの食材を使ってカレーランチのカフェを開催。東京都小金井市にあるインド富士さんにご協力いただきました。

外では出店もやりました。近所の人たちも興味津々。

カレーカフェ



Spicy Valentine 2010 交換しよう♪そうしよう♪



2月14日、東京都北区にある北のハチドリさんと Slow Water Café とのコラボでイベントを行いました。バナナとチョコレートのお話と、カカオからチョコレートを作り、チョコバナナをみんなで食べました。親子企画でたくさんのお子も参加し、初めてのチョコレート作りにみんな楽しんでいました。カカオからどうやってチョコレートを作るか説明中。

●その他、参加イベント

2009/04/18・19 Earth Day Tokyo 2009
2009/05/09 ワールド・フェアトレード・デー
2009/06/12 東京平和映画祭
(オリーブオイル販売)

2009/06/13 平和学会で at 及び商品販売
2009/09/12 ATJ20周年記念イベント「出会う！つながる！
力を出し合って切り開く未来」
2009/10/25 フォーラムアソシエ文化祭
2009/11 グリーンコープ “from ネグロスセミナー”



調査研究

民衆交易・フェアトレード研究会

2008 年度より継続して、民衆交易・フェアトレード研究会を行いました。

【開催日】 2009 年 4 月 16 日、5 月 21 日、6 月 18 日

ATINA 社エビ加工労働者調査

インドネシア・スラバヤにあるエコシュリンプの加工場 ATINA 社。ここでは約 230 人の労働者が働いています。エビが日本に届くまで、加工に携わっている人たちがいて、おいしいエビが食べられます。より「顔の見える関係」を強めるため、そこで働いている人たちの実体を知る調査を行いました。調査は、間瀬朋子さんに依頼し、2009 年 8 月から 12 月にかけて現地にて調査を行いました。まとめとして、2010 年度にブックレットを作成予定です。



ATINA 社の加工員さんたち

民衆交易 20 年・ balanゴンバナナ事業調査

2009 年に 20 年目を迎えた balanゴンバナナの民衆交易。始めは何を目標にして、現在どこまで到達できたのか。今フィリピン・ネグロス島の現場はどうなっているのか。生産者や関係者の聞き取りや、20 年間の社会的変化を含めて調査を行いたいと考えています。そのための事前調査を APLA 理事の市橋秀夫さんが行いました。



市橋さん調査風景。生産者にインタビュー。

■ 2009 年度 APLA 活動一覽

	海外活動	交流 / ツアー活動	広報 / イベント活動	調査研究 / シンポなど	国内事業
4月	●東ティモール・KSI と打ち合わせ ●インドネシア・ATINA 社と打ち合わせ	●「地球的課題の実験村」寄り合い参加	● EARTH DAY TOKYO 2009 出展	●民衆交易フェアトレード研究会⑨	● APLA SHOP カタログ 2009 春夏号発行
5月	● APLA フォーラム参加のため、海外ゲスト（フィリピン・ネグロス / 北部ルソン）来日	● APLA 企画国内ツアー@三里塚	● APLA フォーラム開催@三里塚 ●ワールド・フェアトレード・デー出展 ●機関紙ハリーナ vol.2-4 号発行 ●手わたしバナナくらぶニュース 194 号	●民衆交易フェアトレード研究会⑩	●カフェ・ライ・ティモール（東ティモールコーヒー）販売再開 ●マスコバド糖くろあめ販売休止
6月	●ネグロス・ATC と打ち合わせ、NBA 会議出席	●和光大学ツアー事前学習会	●東京平和映画祭参加（物販） ●平和学会参加（物販）	●民衆交易フェアトレード研究会⑪	● DVD『オリーブの木がある限り』販売
7月	●北部ルソン・BM プラント設置 ●カネシゲファーム（KF）復興作業開始	●グリーンコープ青少年ネグロス体験ツアー@ネグロス	● APLA 1 日カレーカフェ ●手わたしバナナくらぶニュース 195 号	● ATINA 社労働者現地調査開始	●エコシュリンプお中元ギフトセット販売
8月	●北部ルソン・BM プラント出水式 ●ネグロス・NBA 会議、ATFI 理事会出席	●和光大学ネグロス短期留学（農村ツアー） ●名誉顧問 前島氏ネグロス訪問	●機関紙ハリーナ vol.2-5 号発行 ● APLA レポート no.1 発行	●市橋氏ネグロス視察	
9月		● APLA 企画国内ツアー@北海道	● ATJ20 周年記念イベント ●手わたしバナナくらぶニュース 196 号		
10月	●韓国・APF 設立総会出席 ●韓国・APF 農村ツアー参加		●グローバルフェスタ 2009 出展 ●フォーラムアソシエ文化祭出展		● APLA SHOP カタログ 2009 秋冬号発行 ●手わたしバナナくらぶリニューアル
11月			●グリーンコープ “from ネグロスセミナー” ●機関紙ハリーナ vol.2-6 号発行 ●ブックレット『Maayong Hapon フィリピン・ネグロス』発行 ●手わたしバナナくらぶニュース 197 号		● “みんなで作るコーヒー” ハイチ販売再開 ●マスコバド糖くろあめ販売再開 & リニューアル ●ナチュラレッサ販売休止
12月	●ネグロス・BM 技術協会 KF 視察	●恵泉女学園大学ツアー事前学習会		● ATINA 社労働者調査報告書受け取り	●エコシュリンプお歳暮ギフトセット販売 ●イボン・マラヤ羊毛クラフトグッズ販売 ●マスコバド糖石けんギフトセット販売 ●北部ルソン織物グッズ販売
10/ 1月	●東ティモール・農村訪問、KSI と会議		●手わたしバナナくらぶニュース 198 号	●民衆交易・フェアトレード研究会：まとめのための座談会開催	●マスコロック、マスコフレックス数量限定販売
2月		●恵泉女学園大学ツアー@ネグロス	● Spicy Valentine 2010 ●機関紙ハリーナ vol.2-7 号発行 ● APLA レポート no.1 発行		● “バレンタイン” コーヒー & チョコレートギフトセット販売
3月	●インドネシア・ATINA 石けんセミナー ●ネグロス・ネグロスツアー同行、KF-RC 開所式参加 ●北部ルソン・パートナー訪問	● APLA 企画ツアー『新しいネグロスに出会うツアー』	●手わたしバナナくらぶニュース 199 号		

ネットショップ (APLA SHOP)

全体としては、季節によって注文件数に大きな差が出るため在庫管理が難しいという印象がありましたが、在庫期限切れをセール品で出すようにしたことで多少余裕を持って在庫を持つことができました。2009年度はエビやせっけん、マスコロック・マスコフレックス、バレンタインギフトなど季節に合わせたスポット商品の展開ができ概ね好評を得ていたため、機会を見つけて続けていきたいと考えています。また、北海道の羊毛クラフトや北部ルソングッズなどの取り扱いもでき、APLAが活動の中で得たつながりの成果が販売という面でも現れたかと思えます。

一方、顧客への対応・サービスという面が徹底出来ていない、丁寧さを欠いているという反省点があり、APLAショップはAPLA会員以外の方、ネットで通りすがりに

2009年物販売り上げまとめ (09年4月～10年3月)

年間総売上高 (粗利益)	7,470,029 円 (2,343,373 円)
月平均売上高 (粗利益)	622,502 円 (195,281 円)
注文1件当たり平均売上	6,829 円
総受注件数	1,088 件

買ってみたい方なども利用していることを考えると顧客への対応に関してさらに自覚して作業を行う必要があるように感じています。

次年度は、スポット商品やAPLAのおすすめ商品なども強化していきたいですが、商品をつくる人、買う人の架け橋となれるよう商品だけでなく活動、作り手の紹介にも力を入れていきたいと考えています。

手わたしバナナくらぶ

●リニューアル報告

2009年度の新規入会者は8名、内リニューアル記念で行った入会キャンペーン中(2009年10月)の新規入会者は4名と、新規入会者の半数をキャンペーン中に得ることができました。リニューアルの報告としては、2009年4月～9月までの6ヶ月で5kgが262件出していたのに対し、2009年10月～2010年3月までで3kgと6kgの注文件数合算が261件となりました。例年12月～2月の冬期は寒さのため注文数が減ってしまいましたが、新規会員を得ていたことや、リニューアルによる重量規格変更後も利用しやすくなったためか、会員さんが引き続き利用してくださったことが注文数確保に役立ったと考え

現在会員数 124名

年間出荷件数 (月平均)

20kg	10kg	6kg	5kg	3kg
61件 (5)	152件 (12)	106件 (17)	262件 (43)	155件 (25)

※5kgは2009年4月～9月まで、3kgと6kgは2009年10月～2010年3月までで集計。

ています。

今後の課題としては、20kg、10kgの注文数を増やすべく、共同購入や教会、幼稚園、保育園などへ案内をしていきたいと考えています。また、現行のシステムでは会員さんの反応が分かりにくいので、定期的にアンケートなどを取って要望や感想などの声に積極的に耳を傾けていきたいと思えます。



新しくなった箱のデザイン

緊急支援報告

2009年度は、5つの災害に関する緊急支援を行いました。

- ① パレスチナ・ガザ地区緊急支援 (2008年度から継続) ￥14,242,065
- ② フィリピン・台風16号(ケツァーナ) マニラ周辺地区への被害 ￥331,459
- ③ インドネシア・スマトラ島沖地震の被害 ￥267,162
- ④ フィリピン・北部ルソンの米・トウモロコシ農家への台風16号、17号による被害 ￥985,003
- ⑤ ハイチ地震被害 (2010年6月15日まで継続) ￥1,378,920

※ACT / Action by Churches Together : プロテスタント系の世界的組織で緊急支援を行っている団体)

★②、③、⑤はAPLAの関係組織である日本キリスト教協議会(NCCJ)も参加しているACTという団体に送金。

< 組織体制 >

理事：秋山真兄（共同代表）、疋田美津子（共同代表）、村井吉敬（共同代表）、吉澤真満子（事務局長）
市橋秀夫、上田誠、大野和興、鹿毛優子、廣瀬康代（以上9名）

監事：近藤康男

評議員：有竹正寿、奥万里子、出口雅子、橋本順子、弘田しずえ、堀田正彦、堀芳枝、前島宗甫、幕田恵美子、持井啓吾
（以上10名）

名誉顧問：前島宗甫、白柳誠一（2009年12月逝去）

事務局員：吉澤真満子（事務局長）、松田麻衣子（専従）、野川未央（非専従）

現地担当デスク：大橋成子（フィリピン）、津留歴子（インドネシア・東ティモール）

< 総会・理事会・評議員会 >

総会：第2回総会（2009年5月16日）

理事会：第4回（2009年9月26日）第5回（2010年2月6日）第7回（2010年4月24日）

評議員会：第3回（2009年9月26日）第4回（2010年2月6日）

< 用語集 >

NBA APLAの前身団体である日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC）の時からつながりのあった農民団体の頭文字を取って名付けた農民ネットワーク。ナガシ農地改革受益者組合（NARB）、バランゴンバナナ生産者協会（BGA）、ネグロス有機農家連盟（ANOFA）の3つの団体で構成されている。●ネグロス

KF カネシゲファーム。1989年に始まった民衆交易、その後、産地で発生したバナナ病害の対策に尽力した当時のグリーンコープ専務理事・故兼重正次氏を偲んで名付けられた農場。1996年に設立以降、現地のオルター・トレード社（ATC）がバナナ実験栽培を中心に管理。●ネグロス

KF-RC カネシゲファーム・ルーラルキャンパス。2009年7月より、農民が主体となって運営する農場と学校を作る場としてAPLAが20年間の契約でATCから土地を借り受けた。農場の復興作業を行い、2010年3月に開所式が行われ、農場の名前を新たに「カネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KF-RC）」とした。

ATC オルター・トレード社。1987年にフィリピン・ネグロス島で民衆の生産物を流通させる自前の地域物流システムをつくることを目指して設立された会社。主な事業として、バランゴンバナナとマスコバド糖の輸出と国内販売などを行う。●ネグロス

CORDEV Cooperative For Rural Development（農村発展のための協同組合）。1996年からバランゴンバナナ産地のひとつに加わり、生産者の組織化と出荷作業を担ってきたが、2008年、地産地消を目指す協同組合に組織再編した。スタッフは先住民族が中心。マニラやバギオ市などの消費地をにらんだ国内流通を目指している。●北部ルソン

ATINA オルター・トレード・インドネシア社。エコシリンプの輸出・加工、産地における社会活動を行っている。「命・自然・暮らしを守る」を基本理念とし、環境・社会改善運動としての有機技術の開発・普及を目指している。地域運動にも関わり、マングローブの植林活動、石けん運動にも取り組む。●インドネシア

KSI 和解と社会変革をめざすNGO。2000年に設立された東ティモールの地元NGOで、前身は東ティモール大学の学生が中心となって作った学生グループ・東ティモール学生連帯評議会。地域和解と社会変革を通じた地域の自立支援を目的に活動している。ポルトガル、インドネシア時代、そして独立後も住民にとって解決されていない土地問題に関する調査・提言や暴力の犠牲者への支援、農村部の協同組合による生産、女性たちが中心のキオス（農村の日用品を扱う店）運動を通じた民衆流通など幅広い活動を行う。●東ティモール

ATJ ㈱オルター・トレード・ジャパン。民衆交易を行う事業体。“もの”から“こと”へというフレーズに象徴されるように、単なる支援活動ではなく、“もの”の生産・流通・消費を通じて、つくる人と食べる人が直接出会い、共に支え合う関係を築く生活協同組合やJCNCが母体となり生まれた事業体でもある。●日本

APF 互恵のためのアジア民衆基金。経験・知恵・技術交流のネットワーク形成と金融事業に取り組み、南の国々での持続可能な農林漁業を基礎とした地域作りを支援し、“南北・南南”の民衆交易の発展を目指している。社員団体の会員・組合員から抽出された財源を元に、アジア各国の小規模ビジネスに融資を行う。

BM 技術協会 BMW 技術を研究、活用、普及し、「自然観を変え、技術を変え、生産の在り方を変える」ことを目指すものたちの全国組織。●日本

BMW バクテリア（微生物）・ミネラル（造岩鉱物）・ウォーター（水）の略。バクテリアとミネラルの働きをうまく利用し、土と水が生成される生態系のシステムを人工的に再現する技術のこと。

AID 財団 オルタナティブで土地に根ざした開発を目指す団体。小規模な水道システムの充実を図ることを目的に、水利用における適正技術の開発や導入を行う。●ネグロス



KANESHIGE FARM-RURAL CAMPUS



特定非営利活動法人 APLA 2009 年度事業報告

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿 3F

☎tel> 03-5273-8160 ☎fax> 03-5273-8667

✉E-mail> info@apla.jp <URL> http://www.apla.jp